

中宮八院と那谷寺の盛衰

ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう ちゆうぐう

中宮八院推定地の位置



『加賀国府と中宮八院』小松市教育委員会編に拠る。国土地理院発行2万5000分の1地形図(小松、平成13年・別宮、平成9年)を使用

鎌倉時代末期の元徳二年(一一三〇)閏六月、白山加賀馬場の中宮の傘下にあった、能美郡軽海郷付近に所在する

別院八カ寺(白山中宮八院)の衆徒等が、同郷の代官堯観の横暴を朝廷に

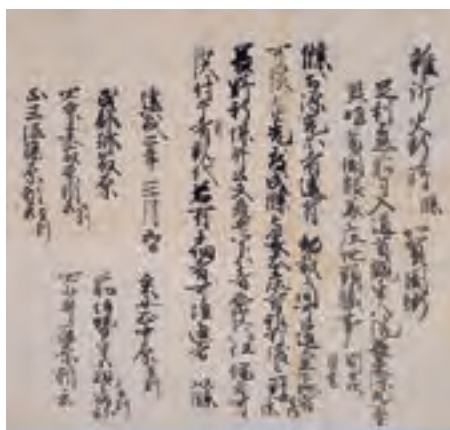
訴えた。それは前年に軽海郷が武蔵国金沢(現横浜市金沢区)の称名寺領となり、堯観が代官として現地に乗り込



白山加賀馬場の中宮勢力の伝統を継承する「那谷寺」大悲閣拝殿

み、八院とその末寺の岩蔵寺の従来からの寺域を乱したためであった。

その濫妨停止の勅裁を求めた申状によれば、八院の創建や寺域の成立時期が語られており、十一世紀後葉から十二世紀末に、加賀の国守や目代・在庁官人等が敷地や山林を寄進し、国衙がそれを公認して、寺院の基礎が固められていた事情がうかがわれる。中宮八院は、軽海郷内の護国寺・昌隆寺・松谷寺・蓮花寺・善興寺・長寛寺・涌泉寺の七カ寺と周辺部に所在した隆明寺から構成され、能美・江沼両郡の南加賀を信仰圏とする白山中宮勢力の主力をな



建武2年3月5日付雑断所牒案(京都府八幡市 石清水八幡宮所蔵)

しており、他に「白山五院」「三个寺」など、江沼郡に分布する中宮の末寺も知られた。

平安末期の安元二年(一

一七六)八月、加賀の目代藤原師経が、国衙近傍の中宮八院の一つである涌泉寺を焼打ちした事件は、やがて八院衆徒の国衙襲撃に発展した。師経の兄で加賀の国守である藤原師高の断罪を要求する衆徒等は、白山麓の佐羅早松社の神輿を奉じ、比叡山延暦寺の衆徒の支援を得て、京都に強訴に及んだ。

期には次第に衰え、建武二年(一三三五)三月には、建武政権の訴訟機関(雑断所)が、中宮長吏源光等の能美莊進出を、濫妨行為として退けていた。ついで康永年中(一三四二~四五)に至り、八院は没落する。その事情は定かでないが、八院の衆徒等が、内乱の過程で南朝方に味方したのが原因とされている。しかしこのとき中宮系神社の中で、江沼郡三个寺の内的那谷寺だけが、内乱の当初より足利尊氏方北朝に属し、南朝と結ぶ八院方攻略に戦功を立てており、その恩賞として八院所縁の軽海郷の知行を望み、同郷の領主称名寺を慌てさせていた。

那谷寺は、没落した八院等の遺産を継承して、中宮勢力では唯一その後も存続・発展することになり、天台宗を離れて、真言宗の山城観勝寺や醍醐寺金剛王院との関係を深めている。また長祿三年(一四五九)三月晦日、火災に遭ったのが知られるほか、室町・戦国期に、同寺の子院として本泉坊・華王院・福蔵坊・宝光院・明王院がみえ、戦国期には、観音深秘の霊場で、瑪瑙の産出地となっていた。(東四柳史明)



文明4年5月3日付那谷寺本泉坊全尊置文案(京都大学総合博物館所蔵)